

【論文】

2つの中心と上下のメタファー

梅本 孝

The Two Centers and UP and DOWN Metaphors

Takashi Umemoto

言語に立ち現れる上下に関する表現の成立を言語外の世界から説明しようと試みた。その際に上下に関する表現の成立は2つの事態から考える必要があることを主張した。一つが身体性でありもう一つが環境である。その2つの事態により2つの種類の中心—身体依存の中心と環境依存の中心—が発生すると考えた。その2つの中心に近づくという概念が「上」であり、そこから離れるという概念が「下」であると仮定した。

身体依存の中心は主に換喩により大きな意味の変動が見られる。環境依存の中心は主に隠喩により意味の変動が見られる。「上」が「過去」を表すのは環境依存の中心に結びつく「上」であると思われる。

キーワード：2つの中心、上のメタファー、下のメタファー、上と近、下と遠

0 イントロダクション

この小論では上下という概念と近遠あるいは接近離反という概念との結び付きについて日本語と英語を利用し、考察する。この小論では人間に普遍的に備わるようになったであろう概念を、人間の身体性と環境に起因する人間の日常的な体験から想定し、そこから演繹的に言語にどう立ち現われているかを考えている。よって、言語による立ち現われ方の差はここで無視している。勿論、言語による、現われ方の強弱の差を明らかにするの

も意味があることはいうでもないことである。

先ず、次例において上下と近遠あるいは接近離反の概念が結び付いていると思われる例を提示する。

- (1) 上りの電車。下りの電車。cf. up train to town, down train
- (2) おのぼりさん
- (3) 上方。上洛。cf. 下野, 下洛
- (4) 歴史をさかのぼる。
- (5) 歴史をくだる。

近遠あるいは接近離反の概念を想定するためには中心を想定しなければならないと思われる。(1)―(2)では都市は都心と云うように「人口の集中した地域で、政治、経済、文化の中心になっている大きなまち」(言泉、1986)で、都市が田舎よりも中心だと考えられる。そして、その中心であると考えられる都市に接近していることを表すのに「上」、そこから離れるのを表すのに「下」の概念を使っている。(3)は今のみやこ東京を中心と考えているのではなく、むしろ、かつてのみやこ京都、あるいはその周辺を含む京阪神を中心と考えていて、そこを「上」と表している。みやこの場所の変化に言語表現が即応せずに、言語とその指示対象の関係がある程度化石的に固まっていると考えられよう。(cf. Stern 1931: e. g. 166) つまり(1)―(3)では都市が中心であることの認定条件は、人口が集中していて、政治、経済、文化の中心になっていることであると思われる。しかし、すこし考えて見ると、ここには原因と結果の関係が多少読み取れる。つまり、人が集まった結果、そこが政治、経済、文化の中心となっていくと考えられる。勿論、政治、経済、文化の中心となっていく結果、人が集まるということも同時にあるだろう。どちらにしても原因と結果の関係がすこし読み取れ、さらに大事なことはここでは中心という概念が人の存在と強く結び付いていると考えられることである。

(4)―(5)は中心を人と考え、そこにむかっていく概念を「上」、離れていく概念を「下」と表すことはむずかしい。「上」が中心に近いあるいはそ

こに向かうという概念だとすると(4)の場合は古い地点が中心ということになる。古い地点が中心であり、新しい地点が中心から離れている／いくとはいったい何を表しているのだろうか。このように考えると中心という概念をすくなくとも2つ想定しなければならないことになる。

1 中心概念の想定とその意味

中心を想定するということは人間にとって必須のことであろうと考えられる。中心を想定することによってはじめて価値とか意味が生じると考えることもできる。(市川1993:55) これは中心の想定が体系の萌芽となり、体系が生まれたために価値や意味が生まれると考えられる。中心という概念があつてこそ差異の概念が生まれ、程度の概念が生まれると考えられる。(cf. Saussure 1916, 訳本:124; 第4章特に168f; 村上1992:133ff) 言葉を変えて言えば、中心の概念が生じることによって、そうであるものとそうでないものの区別が生じたり、そうであるものに関する程度の概念が生じると言える。Langackerの参照点構造の考え方が可能になるのも中心の概念の発生が前提になっていると考えられる。(cf. Langacker 1993) 参照点は何のものを認識するときの一種の目印であると考えられるが、目印の根源的萌芽は中心の認識にあると思われる。自分が中心である場合には自分が無標の参照点になると考えられる。左右上下などの方向性はもちろん、たとえば、「大きい」、「小さい」といった概念も自分が無標の参照点となっていることによる認識であろう。参照点は自分以外のものが中心になる、いわば、有標の中心を設定することによって成立していると考えられる。このプロセスは自己を中心とする中心化とそこから離れる脱中心化のプロセスと平行していると思われる。(cf. 石上1985:21f; 市川1992:178f)

2 先行研究

中心の概念を設定するという考え方はないものの「上」が「過去」で「下」が「未来」という考え方自体は Traugott (1975)、Nomura (1990) に見られる。Traugott (1975: 222) の説明は以下の通りである。

The association of *earlier* with the positive term *up* and of *later* with the negative term *down* ties in directly with *earlier-in-front*, *later-behind*. Again, the positive term is related to the perspective of our bodies and the psychological space that they determine. What is up at our level is 'canonical' or 'normal' in the same sense that what is in front is canonical.

それにたいして Nomura (1990: 12) は以下のような意見を展開する。

I think there is some truth in her [Traugott's] explanation; however as we have seen in section 3, there are some languages that do not equate "earlier" with "front", or "later" with "behind". Hence, if such languages as Hausa conceive of "past/earlier" as situated higher than "futer/later" just as English and Japanese, then, her explanation will lose ground. [ハウサ語ではたとえば、月曜日は火曜日の前と表すのではなく、火曜日の後と表す]

My guess is as follows: since time moves from past to future, as we have seen above, "past" has to be situated higher than "future" in order for time to move toward "future". To use terms from physics, time is given potential energy by being at higher "past", which enables time to get moving/flowing/running toward lower "future".

Traugott (1975)、Nomura (1990) は両方ともある程度正しい観察を含んでいると思われる。Traugott (1975) については特に身体性に言及した点が注目に値する。目の高さが canonical であることと「前」が

canonicalであることを結び付けることについても基本的に賛成であるし（つまり「上」と「前」を結び付けること）、注目すべきは目の高さ付近のことをupと言っていることである。目の位置が人間の体の中で物理的に上の方に位置するということは間違いがなく、従って、感覚的にも目が上の方にあると感じていることが普通であることは間違いがないと思われる。人間はおそらく400万年ほど前に直立二足歩行を初めてからは、ずっと、（おそらく無標の状態、行為としては）直立二足歩行を続けており、その姿勢を考えると、今述べた感覚は強化こそされ、弱められることはなかったと考えられる。おそらく、通常、換喩によって、headの下限近くの喉の高さくらいよりも上になればupが使いやすくなり、それよりも下のほうに行けば行くほどdownがつかいやすくなるものとおもわれる。このこととupと（接）近との関係はこの時点でもあるていど自明であるかも知れないが、これについてはあとで論じる。

Nomura (1990) の考え方では過去が上にあり未来が下にあるのは物理の法則によってものが上から下に移動するのと同じように時間が上から下に移動するからだとする。この考えかたについても正しい考え方を含んでいるように思われる。しかし、Traugott (1975) と Nomura (1990) は、実は、差し当たっては、まったく別の観点から「上」、「下」の説明を試みようとしていることに留意しなければならない。つまり、Traugott (1975) は身体性の観点から、Nomura (1990) は人間のおかれている環境世界の観点からである。

どちらの観点からみるにしてもそれぞれが人間の日常的な体験とどのようにむすびついているかを考えていくことが肝要である。

3 身体性に関する上下

日常的な体験の中での中心概念の想定はセクション6に記すように大きく分けて2つの種類があると思われる。ここではその一つと関係する身体

性に関して述べる。身体性にかんしては Traugott (1975) の言うように目の高さ付近に言及するのに up をつかっていることに着目すべきである。

地球に重力があるということによりその重力に沿った、地面と垂直の軸の概念が生まれる。そして、重力の為に重力軸に沿って、非対称の感覚が生まれると考えられる。(大抵のものは力を加えなくとも下の方向、つまり、地面の方向に進むが、上の方向には、大抵の場合、力を加えないともものを持ち上げることができない。) (cf. Clark 1973) それに加えて、人の身体が無標の場合には (つまり立っている場合) ^{#1} その重力軸と重なり、且つ、身体は上下で際立った非対称を成しているというところから、おそらく、上下、或いは、上中下の概念が生まれたものと思われる。又、地球には地面という非常に安定した (日常生活の知覚においては) 平面があることによって地面に近い方と遠い方という区別ができる動機付けができてきたと思われる。そういった、上下概念の中で、人間の体の中に於いて目は相対的にみて体の上の方に位置する。

また、あるものが近づいているか、近くにあるかを判断するのは自分の目にどれだけ近いかで判断することが通常である。望遠鏡や双眼鏡や顕微鏡などの機器の発達や virtual reality の発達によって現実の客観的距離と主観的距離とのずれが生じることが多少増えることがあっても目への物理的距離が遠近の判断の一番重要な判断基準でありつづけてきたことは間違いない。この2つのことを考え併せると「上」という概念と「近」という概念が結び付くことに大きな動機づけがあると考えても可笑しくはないであろう。例えば、人間がものを地面に積み上げていくとその物体は次第次第に目の位置に近づいて行くことになる。^{#2} 近づくと同時に上に上がってくることにもなる。Bolinger (1971: 98) は例えば、こう述べている。グラスに水が注がれると、それを見ている人の目の方向に、水位が上がる。水の流れが急に止められた時には、水位が上がっている。だから、up は完了、終了といった概念と結び付くのであり、また、事態を見てい

人の目と見られている対象との隙間を埋めるという概念とも結び付くのであると。

このような体験は人間の通常的生活スタイルから考えてかなり頻繁に発生すると考えても差し支えないだろう。この考え方が確立したあとで、ある中心概念を想定できればその中心に近づく、あるいは近くにあることを表すのに「上」を使うことは可笑しいことではないであろう。

このように考えていくと、「上」と「(接)近」を結び付ける Bolinger (1971:98) の考えに、全く賛成である。しかし、よく考えてみると、人間は重力のある世界に住んでいるので、日常生活の中では頭の上、つまり、目の上から目の方向に向かって、ものが、落ちてくるという体験もかなり多いはずである。例えば、木の葉が落ちてくる、雨が落ちてくる、など。そうすると、このことだけを考えれば、むしろ、「下」と「(接)近」が結び付きそうなものである。しかし、英語と日本語の言語事象から見る限り、そうはなっていない。その理由をここで考察する。先ず、今述べたことに不整合を来さないためには人の周りにおける領域を設定する必要があると思われる。それを下の図で表わす。

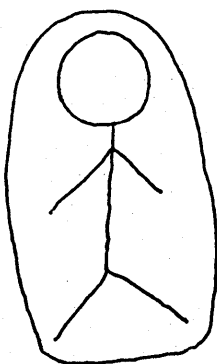


Fig. 1

この人の周りの領域は Langacker (1988) の言う immediate scope にあたると考えられる。人の体の中で先ず間違いなく「上」と言えるのはお

そらく常識的には head (首から上のあたま) に当る部分とその周辺であるだろう。頭を「上」だと考えているのは「頭に血が上る/*下がる」という表現からも明らかだろう。^{#3#4}その「上」がプロファイルされているときには人全体が immediate scope となる。同じように、右手がプロファイルされているときにも immediate scope は人全体ということになるだろう。そう考えると、この immediate scope の中で考える限り、目は「上」の一部であるので、当然、目は「上」であるという意識があるはずなので、目に近づくということは「上」に近づくと言うことになる。ここで (接) 近と「上」がつながることになる。

人間の目に近いところにくると up が使われ易くなり、下のほうに行くほど down が使われ易くなるのは(6)、(7)のような例文を考えると分かりやすい。

(6) It's up here. (もううんざりだという意味で喉のところに手をやりながらの発話)

(7) down there (陰部を表す場合)

(8) Look at the baloon way up there!

より普通のコロケーションとしては、身体性による動機付けにより、(6)-(7)のように up とは there よりも here、down は here よりも there と繋がるとおそらくいえるであろう。勿論、(8)のように自分の目の位置から離れて上の方にある場合には up there が普通であろうし、down here も例えば、黒板に日本地図を書いて、北海道を言及するのに指で指し示しながら up here と言い、その次に沖縄を指すのに指で指し示しながら down here を言うのは問題がないと思われる。しかし、それらの類例を除くと普通でない方のペアが使える範囲はある程度限定されてしまうようにも思える。^{#5}

この身体性依存の上下の中心は「人の目」と言うことになる。しかし、換喩によって「人の目」はすぐに「人そのもの」を意味するようになったとしても不思議ではない。又、「人そのもの」からさらに換喩によって

「人の家」に中心という意味が備わるのも不思議ではない。さらに、「人」から（おそらく1面では「人の家」から）、換喩により「人の多くいる場所」が中心という意味を帯びることもあるだろう。「人」は基本レベル（basic level）（cf. Talor 1989: 46 ff; Lakoff 1987: 31-40, 46-54）であると考えられるので「目」から「人」への部分から全体への換喩は強く動機付けられていると言える。もっとも身体依存の中心がいつもいつも「人」という領域（domain）だけに限定されるわけではないことを繰り返し述べておく。^{#6}

4 環境世界に関する上下

環境世界にかんしても日常の体験とのかかわりあいを考える必要がある。人間は重力のある世界に生きているということがここでの大前提である。重力のある世界に生きている限り、おもさのあるものは大抵上から下に移動することになる。そして、それを人間は太古の昔から目のあたりにしてきたであろうことは間違いがない。人間の生活に於いて常に必須の要素であり、時空間を超えて普遍的に人間が生活の中で接し続けてきて、上から下に移動することに注目されやすかった代表的な物体の一つはおそらく「水」であろうと思われる。^{#7}人間は生活用水としての水を得るために何らかの形で川（又はそれに類するもの）とかかわり合って生きてきたと思われる。雨水に大きいたよって生きてきたひとびとの住む場所でも生活に必要なくらいの雨が降れば、一時的にせよ川ができたことは想像に難くない。そうすると、川の水の流れの動きを見てきた体験によって人間の基本的なものの捉え方の傾向性の一部、たとえば、「上下」や「遠近」の概念がそれと結び付く可能性を考えることはそれほど荒唐無稽ではない気がする。つまり、川の水のながれに従って、水の発生源に近いほうを「上」、水が流れつく先に近いほうを「下」と認識してきたことは間違いがない。そして、人間は物事の発生源を中心と考える認識の仕方があると想定すれ

ば、水の源、つまり、水本（みなもと）を中心の一つと考えてきたと想定しても構わないだろう。このように考えれば、この日常の体験から、「上」と「近」、「下」と「遠」が結び付く可能性が出てくることになる。(4)、(5)の例はこの考え方にもとづくとうまく説明できるように思われる。つまり、水の発生源は古い地点（あるいは発生源に近い水は古い水）であり、発生源から離れるにしたがって、新しい地点（あるいは発生源から離れている水は新しい水）と認識するということである。とすると、この考え方をとる限り、時間を水の流れと平行したものとして捉えても不思議ではない。そして、「上」—「近」—「過去」、「下」—「遠」—「非過去」の図式ができ上がる。この意識が一部、具現化したと思われる例が年表である。年表が上下に記されているときは上が過去で下が非過去である。年表と呼ばれるもので垂直に書いてあるものに関して逆の例は希有である。³⁸

それと関係しているであろう例をここで挙げる。

(9) 予定を繰り上げる。(Nomura 1990 : 11)

(10) 予定を繰り下げる／繰延ばす。(cf. Nomura 1990 : 11)

さらに英語においても類例がある。

(11) The meeting has been brought up a week. (Traugott 1975 : 221)

(11)は(12)のようにも言うことができるが、(13)のようには言えない。

(12) The meeting has been brought forward a week.

(13) *The meeting has been brought down a week.

予定を「繰り下げる」場合には(14)の様に言う。

(14) The meeting has been pushed back a week.

又、(15)は(13)ほどおかしくはない。

(15) ??The meeting has been pushed down a week.

push down は1日の中の予定という意識がある場合には使いやすい。以下の例を参照。

(16) On agenda for a day the meeting has been pushed down to 4 o'clock.

- (17) Discussion on topic B will be pushed down to 4:00 p. m. on today's agenda.

この英語の例を見る限り、「上」と「前」、「下」と「後」が繋がっている。日本語に例えば、「上」と「過去」が結びつく例に次のような例がある。

- (18) 上巻／下巻
(19) 上代
(20) 上で述べた事柄

水の流れの発生源に近いところは地勢的に上のほうにあり、発生源から遠いところにある地点は下の方にあるのでつぎのような表現が立ち現われるのも無理はない。

- (21) アマゾン川上流
(22) the upper Amazon
(23) upstream/downstream

環境依存の中心は、上で見た通り、発生場所である。人の生活に於ける必要性から特に水の発生場所が第一の中心であると思われると述べた。しかし、身体依存の中心と同じように、その領域 (domain) のみ为中心とみなせると言うのは言いすぎであろう。環境依存の中心は恐らく多くの場合、換喩よりも隠喩によって、水以外の発生場所も中心とみなせるであろう。

又、環境世界の上下に関して関与しているのは水だけと言っているのではない。水を一つの代表選手と言っているだけであって、重力に従った物体の動きはすべてここでの上下の概念に関与する可能性がある。

5 文化に関する上下

身体性による上下と環境による上下に加えて文化に関する上下も完全には無視することができないものである。しかし、能力も知識もないので、この小論ではあまり大きくは扱わない。このセクションでは関係している

と思われる例を一つ出すだけに止める。

(24) 家に上がる。

(24)は家屋が地面よりも上にあるということが基盤になっている表現であることが読みとれる。もし、家屋が地面より下であって、階段を下がって家の中に入っていきことが普通の文化圏であれば、家に客をいれるときに「お上がり。」ということは言いにくい。「お下がり。」となったかもしれない。なお、次の「中心の想定のみまとめ」さらに少しだけ論じる。

6 中心の想定のみまとめ

上下が近遠あるいは接近離反と結び付くということは中心を想定しなければならぬということでもある。(接) 近はある地点に対して(接) 近であり、遠あるいは離反はある地点に対する、あるいはある地点からの離反である。ある地点とは中心のことである。中心という概念と接近、離反という概念は同時発生的であると考えられる。

中心をどこに想定するかは、したがって、2つの種類に分かれることになる。(1)―(3)のように人間のいる場所を中心とする場合(身体依存の中心)と(4)―(5)のように物事の発生する場所を中心とする場合(環境依存の中心)である。この2つの考え方に平行すると思われる例が次のaとbの例である。

(25 a) up to now/up to date/upcoming

(25 b) down to the present^{#9}

(26 a) up train to town

(26 b) upcountry/upstate^{#10}/upstream/upriver

(26 b)' uptown/downtown

aの例が人を中心とした場合の「上」、bの例では源を中心とした場合の「上」が想定できる。(25 a)は今の時点に近い、あるいは、近づいていることを表わしている。この「今」は人間である話し手のいる場所と捉

えることができよう。(25b)の「現在」は過去から流れてきた時間の流れ着いた場所を表わしていると考えられる。話し手はその流れをどこかで見ているのであろう。

つまり、非常に大雑把に言えば、「上」は人の多いところ、例えば、都心を表わす場合と、奥地、田舎、を表わす場合があり、表面上、2つの逆の概念を表わしている様に見える。「下」も都心を表わす場合 (downtown) と、田舎を表わす場合 (go down、下りの電車) と表面上逆になる。こういったことは中心を2つ想定することに拠って解決される。もともと日本語の場合「上」と田舎との結び付きは、今のところではないように思える。(26b)の英語の up は日本語ではおそらく「奥」に近い。これは「上」が都心に向かうということを表わすのに、わざわざ同じ言葉に逆の意味を付与すると混乱が生じる可能性があるために逆の意味がブロックされたのであろうか。

又、吉村(1967)によると日本の茶室には2つの中心—炉と床の間—があるそうだが、この中心は、それぞれ、人の中心と源の中心の概念に平行している可能性がある。^{#11}

さらに著名な宗教学者のエリアーデ(1974, 訳本: 57 ff) は中心を4つに分類していると思える。

- 1—宇宙山。創造が始まったところ。
- 2—宇宙木
- 3—供犠に用いられる柱
- 4—住み家。

この小論中の中心と対応させれば、1が環境依存の中心であり、4が人依存の中心(身体依存の中心)となる。住み家は人の居るところであり、換喩によって住み家が中心になっていることは明らかであろう。2、3は文化依存の中心の色彩がよりつよいのであろうか。聖なるところは文化圏によってある程度違う。聖なるところは木であったり、山であったりする。神殿であったり、教会であったり、寺であったり、神社であったりす

る。市川（1993：162 f）によると、ヨーロッパでは教会は町の中心と山の頂にあり、日本の場合の神話的中心は集落のはずれにある。山があると麓に神社があるとのことである。又、日本人の聖なる空間は奥にあるとも考えている。^{#12}

奥が聖なところで、そこが中心ということになれば、この小論の環境依存の中心と重なることになる。

又、市川（1993：161）は未開社会に於いては「身体一家一神殿一都市一宇宙」という入れ子構造が互いに互いの象徴となると考えている。もしこれを中心の入れ子構造と考えれば、身体依存の中心の換喩が読みとれることになり、文化的中心も身体依存の中心と環境依存の中心の影響を完全には排除出来ないのかもしれない。

7 仕上げるの「上げる」

「上」が「終了」の概念を多少なりとももっているように思える例がある。たとえば、次例。

(27) 仕上げる

(28) drink up

これらの例は今まで述べたことに関連においてはどのように考えればよいだろうか。「上」が「(接) 近」を表すとすれば、この「上」はなにに近いのであろうか。上で述べた様に（この「上」も「過去」と結び付いているように見える）、近いという概念には中心を設定する必要があり、中心には身体依存の中心と環境依存の中心の2つがあることを想定した。直観的には仕上げるの「上」に環境依存の中心を想起することはむしろ難しく、身体依存の中心の方が想定しやすいように思える。つまり、例文（25 a）の「上」の概念に近い可能性がある。その考え方を採ると、人間の今いる場所が今いる時間に転用され、その中心に近いと考えられる。今いるところ／時点で近いということでこの場合の「上」が「終了」の概念と結び付

く可能性が出てくるものと思われる。また、現在完了の用法に於いて、所謂完了用法なるものを想定しやすいのは今の地点か今の地点に近い地点で出来事や行為が完了したと想像できる時であるように思われる。Nomura (1980: note 18) は「上」と「過去」の結び付きによってこれを説明できる可能性に言及しているが、どちらの方がよりうまく説明できるかは今後の課題としたい。

8 この論文で主張したこと。

- A) 上と（接）近、下と遠、離反のそれぞれの概念に結び付きがあること
- B) A によって中心を想定しなければならないこと。そして、その中心は少なくとも2種類想定しなくてはならないこと。
- C) B によって想定した中心は一つが身体性から発生する人に依拠した中心であり、もう一つは人を取りまく環境（特に重力）に依拠した中心であること。
- D) 中心は無標の参照点となりうる可能性があること。

〈注〉

1. 例えば、間藤（1970：160）や自分自身の観察や体験に依ると、子供が描く人間の絵は基本的に立っている姿である。ことばづかいの点から考えても、「横にする」、「横になる」「横たえる」などとは言いが、「*縦にする」、「*縦になる」「*縦たえる」などとはふつう言わない。これは立っている姿が無標であると考えると合点がいく。
2. 「*積み下げる」という言い方が通常できないことも興味深い。これは、次のセクションの環境世界の問題とかかわっていると思われる。我々が重力のある世界に住んでいることを考えれば「積み上げる」と「積み下げる」の容認度の差は明らかであろう。無重力の世界での生活ならば粘着力を持った表面を持つ箱を使えば、箱を「積み下げ」たり、「積み並べ」たりできそうである。厳密にことばの問題だけを考えるならば「積み上げ

る」がよくて「積み下げる」がいけない理由を見つけることは難しい。反論もいろいろ考えられるだろう。たとえば、そもそも「積む」という言葉には「上がる」や「上げる」しかこないという選択制限をある程度自動的に想定しておけばすむのだと考えても、それではその選択制限の理由をまったく説明できないことになる。これを選択制限だと考えてもそれは原因と考えるよりは結果として考えるべきことである。すこし違う角度から「積む」がもつ意味から考えて「上がる」や「上げる」しかこないのだということもできるが、それでは「積む」という言い方が普通であってその逆にあたるいいかたを想定しにくいのはどうしてかという問題が発生し、「積み上げる」がよくて「積み下げる」がどうしてもいけないのかという問題と近づき、再び環境世界と日常体験の問題に戻ることになる。たとえば、「降ろす」は通常「積む」ということが先行している必要があるということと、積まれているものを降ろすときには積まれているものの高さまでいわば地面が上がっているのだと想定するとやはりその場に「降ろす」とは、そことは別に一段高い場所に荷物などが積まれている状態でない、言いにくい。つまり、地面にもものを積むことはできても地面からものを降ろすことは通常むずかしいということである。また、「積み降ろす」という言い方があるために「積み下げる」がブロックされているという反論もできる。これはもっともな反論である。しかし、「積み上げる」の場合は「積む」ということを行うことによって「積み上げる」ということが同時平行的に起こるのに対して、「積み降ろす」は積んでいたものを、降ろすという意味合いが強くなり、「積み降ろす」のために通常「積む」ことが時間的に先行する必要性が生じ、まったく対等な反対語とはいえない面がある。

3. 一旦頭が上だという意識ができ上がると、たとえ横になっていても、頭を下にしている、「頭は上」だという意識はある程度継続すると思われる。逆立ちして「頭を下にする」などと言うが、「上にある」という意識があるためにそのような表現となり、逆立ちした状態でも「頭に血が上る」と、依然として言うことができる。
4. up to my waist などと言うときは下半身だけが immediate scope に入っていると考えれば腰の部分が「上」となる。しかし、人の体の中で普通に「上」と言うときの無標の immediate scope はやはり体全体であろう。
5. 次の例では上下に関して目の位置が大きく関わっていることをそのまま素直に表現しているように思える。

(i) 目上

(ii) 目下

こういった上下感覚は上下感覚は自分一人の身体性によってのみ決まるのではなく、人が他の人と典型的にどのように係わるのかという日常に経験によっていると思われる。(cf. Clark 1973: 34 f) つまり、人が他の人と係わったと感じるのは典型的には普通は会話をするときであり、会話をするときには普通向かい合うことになる。人は立った状態が無標だとすると、その状態で向き合うと、相手の前面が視界に入る。人の全面の中で、目はとても目立つものであり、高さを測る重要な感覚器官でもある。向き合ったときにはその目の高さがお互いに大体一致する。つまり、他人の目の高さとの一致によってそこに水平感覚が生まれる。よって、相手と自分の上下関係を表わすのに目の位置関係を利用することは十分動機のあることである。相手の目の位置が自分の目の位置よりも高ければ「目上」であり、低ければ「目下」となる。目上と目下はこの物理的上下関係が抽象的上下関係を写像されたものと考えてよいだろう。あるいは抽象的上下関係を言うために物理的上下関係を利用しているといってもいいだろう。(cf. Lakoff and Johnson 1980: 14 ff; Ungerer and Schmid 1996: 168) 又、(余程擬人化されない限り) この表現が人に対してしか用いることができないうことこの理由は以上のことを考えれば自ずから明らかである。

英語に於いても同じだということは次の例から明らかである。

(iii) look up to

(iv) look down on

6. 例えば、「アメリカは世界の中心」などというような例に見られるように、中心という概念は力の集まっているところに生ずるという見方も常識的にはあろう。力の発生を考えると、(i) 人の数、(ii) 経済力、(iii) 政治力、(iv) 権威など幾つかの諸条件が整えば整うほど、力の集まっているところだと認識しやすくなる。しかし、これらの条件も人の数の増加やその地域にいる人に対して持たれている価値の増加と多かれ少なかれ同時発生的なものであると思われる。又、価値を生み出すところが中心であるという考え方も在るかもしれないが、価値は結局力のあるところで生み出されるものである。つまり、ある国家を世界の中心と認識している場合でも結局その国家を人との換喩によって捉えることも可能であると考えられる。
7. 例えば、日本国内を見た場合、樋口忠彦氏によると日本人の生活は谷と沢を中心としてなりたってきたということだ。又、同氏によると西南日本では谷、東国、奥羽日本に於いては沢という地名が無数にあり、それらはすべて非常に古い集落や耕地を示す地名であるとのことである。世界に目を向けても、世界の文明の発生、発達を考えてみても飲み水のあるところ

2つの中心と上下のメタファー

(すなわち川)がその基盤となっていることはあきらかである。

8. ただし、下が過去で、上が非過去だという考え方がないわけではない。これは別の日常的経験によるものであろう。例えば、人類進化の系統図を描く場合には大抵下が過去で、上が非過去である。これは植物や木、或いは、動物、特に、人間が下から上に向かって成長することを見て取った経験によるものであろう。(cf.佐藤 1993: 176 f) 次の例を参照。

(i) the Upper Cambrian (後期カンブリア期)

この意味での upper は「後期～期」という意味になる場合以外は今のところ見たことがない。逆に「前期～期」は lower を使う。

又、ここに入れるべきかどうかかわからない自信のない例に次の例がある。

(ii) 下調べ

(iii) 下見

この「下」は「過去」と結び付いているのではなく、寧ろ、あるものの下にある「基礎」を表わしているのだと考えるべきかもしれない。

9. この down の概念は次のような語句にも現われている。

(i) the singular subject beginning with *How* requires the verb twenty-seven words downstream to agree with it in number (*How...escapes me*). (Language Instinct by Steven Pinker, p. 97)

(ii) from the 19th century downward (19世紀以降)

(iii) 時代をくだって

10. upstate には州北部の意味もある。

11. 「上」座は通常床の間に近い場所を表わすということも直接関係しているかもしれない。そうであるとする、この「上」は環境依存の「上」となる。

12. 樋口忠彦 (1981) によると「山宮」は谷の奥に祭られたようだ。

〈参考文献〉

Bolinger, D. (1971) *The Phrasal Verb in English*, Harvard University Press, Cambridge, M. A.

Clark, H. (1973) "Space, Time, Semantics, and the Child," *Cognitive Development and the Acquisition of Language*, ed. by Timothy E. Moore, 27-63, Academic Press, New York.

Eliade, M. (1974) 『エリアーデ著作集第四巻イメージとシンボル』(前田耕作訳) せりか書房

- 樋口忠彦 (1981) 『日本の景観：ふるさととの原型』春秋社
- 市川浩 (1992) 『精神としての身体』講談社
- 市川浩 (1993) 『「身」の構造：身体論を超えて』講談社
- 石上文正 (1985) 『空間と身体：考現人間学的アプローチ』PMC 出版
- Lakoff, G. and M. Johnson (1980) *Metaphors We Live By*, University of Chicago Press, Chicago.
- Langacker, R. (1988) "A View of Linguistic Semantics," *Topics in Cognitive Linguistics*, ed. by Brygida Rudzka-Ostyn, 49-90, John Benjamins, Amsterdam.
- Langacker, R. (1993) "Reference-Point Constructions," *Cognitive Linguistics* 4, 1-38.
- 間藤 侑 (1970) 『人間：心と行動』日本文化科学社
- 村上隆夫 (1992) 『メルロ＝ポンティ』清水書院
- Nomura, M. (1990) "How We conceptualize Time: Toward a Unified Explanation of Time Metaphors," ms., 1-18.
- 佐藤信夫 (1993) 『レトリックの記号論』講談社
- Saussure, F. de (1916) *Cours de Linguistique Générale*, Payot, Paris (小林英夫訳『一般言語学講義』1972 岩波書店)
- Stern, G. (1931) *Meaning and Change of Meaning*, Indiana University Press, Bloomington.
- Traugott, E. (1975) "Spatial Expressions of Tense and Temporal Sequencing," *Semiotica* 15:3, 207-230.
- Ungerer, F. and H. -J. Schmid (1996) *An Introduction to Cognitive Linguistics*, Longman, London.
- 吉村貞司 (1967) 『日本美の特質』鹿島出版会